

宍道町埋蔵文化財調査報告7

# 椎山古墳群調査報告書

1989年3月

島根県宍道町教育委員会

## 序

出雲国風土記によると、宍道の地名は大国主命が狩で追った猪が石に転じたことより「猪（宍）の通った道」すなわち「宍道」となったとの記載があります。これは神話でしょうが、大国主に託して地名由来を考える古代出雲人の精神文化を感じ取ることができますし、石宮神社にある犬石、猪石は風土記に載る犬の像、猪の像だと言われています。

さて、今回調査をおこなった椎山古墳群は石宮神社のある白石の谷の奥に分布しており、1号墳は県内有数の前方後円墳として県指定文化財になっております。昭和59年より県指定文化財管理費交付金を受け始めたのを機会に、墳丘実測等をとおして椎山古墳群を再度検討をすることができましたのは、宍道町の古墳時代のみならず、宍道湖南岸域の古墳文化を理解するのに大変貴重であったと考えます。

本書が今後の文化財の保護と研究の資料として御活用いただければ幸に存じます。  
最後になりましたが、本調査にあたり御指導いただきました諸先生、墳丘実測や分布調査に御協力いただいた方々、また、惜しみない御理解をいただいた関係各位に心から感謝申しあげます。

平成元年3月

宍道町教育委員会

教育長 福田 幸市

## 例　　言

1. 本書は「県指定文化財管理費交付金」を受けて穴道町教育委員会が実施した椎山古墳群の調査報告書である。

### 2. 調　　査　　体　　制

調査担当者　穴道町教育委員会主任主事　稻　田　　信

事　務　局　穴道町教育委員会事務局

3. 椎山2号墳、3号墳の墳丘実測および伊賀見1号墳の補測調査には西尾克己、桑原寅治、熱田貴保、原田敏照の各氏より協力を得た。記して感謝する。

4. 椎山1号墳、2号墳、3号墳の墳立実測図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を示す。他の方位は磁北を示す。

5. 本書の執筆、編集は穴道町教育委員会事務局の協力を得て稻田がおこなった。

6. 遺物は穴道町教育委員会で保管している。

## 目　　次

## 挿　　図　　目　　次

### 序

例　　言		
I 椎山1号墳の整備	1	図1. 穴道町位廣図 .....
II 位置と歴史的環境	3	図2. 椎山古墳群および周辺の遺跡 .....
III 遺跡の概要	5	図3. 椎山古墳群位置図 .....
椎山1号墳	5	図4. 椎山1号墳出土埴輪実測図 .....
椎山2号墳	9	図5. 椎山1号墳々丘実測図 .....
椎山3号墳	9	図6. 椎山2号墳々丘実測図 .....
椎山4号墳	9	図7. 椎山3号墳出土埴輪実測図 .....
ま　　と　　め	12	図8. 椎山3号墳々丘実測図 .....
IV 周辺の遺跡	13	図9. 伊賀見1号墳々丘実測図 .....
(1) 伊賀見1号墳	13	図10. 伊賀見1号墳石室実測図 .....
(2) 下の空古墳	14	図11. 下の空古墳石室実測図 .....
(3) 犬石、猪石	14	

# I 椎山1号墳の整備

## 1. 椎山古墳群の調査

椎山1号墳は宍道町大字白石字下倉に位置する椎山古墳群中の1基である。椎山古墳群は舌状丘陵に散在する4基の古墳からなるものであるが、どのような経緯で発見されたかは明らかではない。<sup>注1</sup>島根県史、<sup>注2</sup>八束郡誌には、椎山古墳群の名称は記述されていないが、「群集古墳」として、宍道村大字白石内の古墳群が紹介されており、古くから古墳としての認識はあった可能性もある。

椎山古墳群としての名称が最初に出てくるのは島根県遺跡目録が最初であり、その後、山本清氏の「出雲国における方形墳と前方後方墳について」の中で、椎山1号墳は長さ40m、幅22m、高さ（後円部）6mの横穴式石室をもつ前方後円墳として紹介されている。<sup>注3</sup>

昭和48年9月25日、椎山1号墳は島根県の指定文化財となる。この指定説明の中で、1号墳は全長約35m、前方部の幅約23m、後方部の幅19m、後方部の高さ5.5mの前方後方墳として記述されており、この見解はしばらく続くこととなる。

昭和55年、宍道町教育委員会より宍道町埋蔵文化財調査報告が刊行され、その折、椎山古墳群の実測調査を含める再調査が実施された。この調査により、新たに4号墳が発見され、1号墳は埴輪をもつ前方後円墳であると判明している。<sup>注4</sup>

## 2. 椎山1号墳の整備過程

昭和59年度より県指定文化財の適正な維持管理をおこなうため、「指定文化財管理費交付金」を受けることとなった。椎山1号墳の調査および本書の発刊はこの交付金事業の一環としておこなったもので、各年度の事業は以下のとおりである。

### 昭和59年度

1. 古墳および周辺の草木伐採と古墳への進入路の整備。
2. 古墳への進入路に説明板を設置。

(経費104,000円のうち県交付金は50,000円、町費は54,000円である。)

### 昭和60年度

1. 古墳および古墳周辺の雑木の伐採。
2. 古墳に至る進入路の整備。
3. 古墳に至るまでの方向板9枚の設置。

(経費104,000円のうち県交付金は50,000円、町費は54,000円である。)

昭和61年度

1. 古墳および周辺の草刈。
2. 古墳に至る進入路の整備。
3. 次年度に古墳の墳丘測量ができるように標高および座標軸対応の標準杭を設置委託する。

(経費105,000円のうち県交付金50,000円、町費は55,000円である。)

昭和62年度

1. 古墳および周辺の草刈。
2. 前年度設置した標準杭をもとに墳丘測量を実施し、25cmセンターの実測図を作成する。

(経費103,000円のうち県交付金50,000円、町費は53,000円である。)

昭和63年度

1. 古墳および周辺の草刈。
2. 報告書の作成。

(経費 105,200 円のうち県交付金50,000円、町費は55,200円である。)



説明板の設置（昭和59年度）

方向板の設置（昭和60年度）



## II 位置と歴史的環境

椎山古墳群は4基からなる古墳群で、群中には前方後円墳の1号墳と方墳である2号墳、3号墳、4号墳が並んでいる。

古墳群は宍道町大字白石字下倉に所在するもので、古墳の名称は地元に残る小字「椎山」によつてつけられたものである。この地は、宍道湖南岸より約1.5kmほど南にくだるもので、山塊より北東に派生する丘陵上に位置する。現在は草木が生い茂り、見通しも悪いが、もともと丘陵より北を臨めば同過川の形成する白石の谷平野が、南を臨めば、下倉川の形成する谷平野が見おろせたと考えられる。

ここで、白石の谷を中心に宍道町の歴史的環境をみてみよう。今までに確認されている最古の遺跡は櫛文遺跡である。白石の谷の西600mの地点にある伊野谷遺跡をはじめとし、弘長寺遺跡、<sup>注6</sup>三成遺跡が知られているが、いずれも遺物の表採地点であるので、具体的には遺跡の性格はよくわかつていない。

弥生時代になると三成遺跡、平田遺跡、佐々布遺跡、清水谷遺跡、矢頭遺跡が知られており、清水谷遺跡、矢頭遺跡からは弥生時代後期の墳墓と住居跡が確認されている。また椎山1号墳の南西約300mからは黒曜石が表採されており、櫛文または弥生時代の遺跡があった可能性もある。

白石の谷は宍道町でも有数の古墳密集地域であるが、現在確認されているだけで3基の横穴式石室をもつ。椎山1号墳は石材が抜き取られているものの、来待石を利用した狭長な石室をもつていて考えられる。椎山古墳群の北約1kmにある伊賀見古墳群中の1号墳は石棺式石室と呼ばれる横穴式石室をもち、6世紀中頃と考えられる遺物を出土している。<sup>注8</sup>また椎山古墳群の北東約300kmには同じく石棺式石室をもつての空古墳がある。1つの小谷にみられるこれらの横穴式石室は形態の変遷を考えるうえで重要であり、特に遺物の少ない石棺式石室の中にあって、豊富な出土遺物と石室、墳丘を残す伊賀見1号墳は宍道のみならず、出雲地方

の古墳文化を知るうえにも大きな位置を占めている。

<sup>注9</sup>「出雲國風土記」に宍道の地名由来として「犬石、猪石」の伝承が記載されているが、石宮神社にある巨石がそれに相当すると考えられている。神社の脇にある2つの石が「猪石」で、社殿の裏にあり、御神体となっている石が「犬石」と伝えられている。これらが「風土記」記載の寸法と一致するのはその信憑性を高めているといえよう。



図1. 宍道町位置図

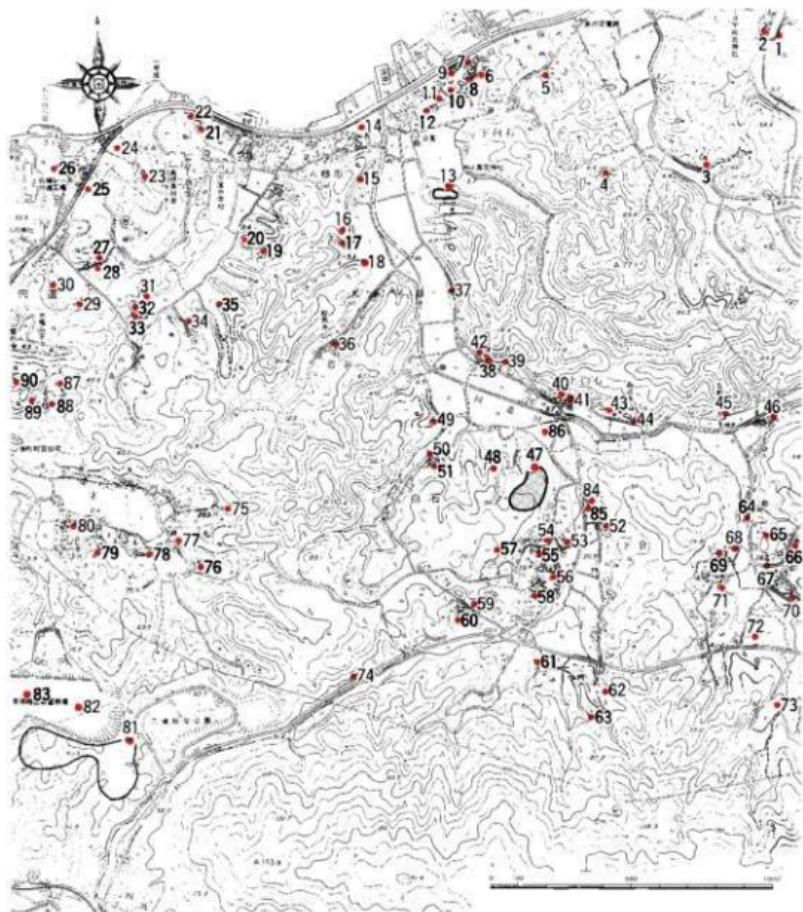


図2. 椎山古墳群および周辺の遺跡

1. 東カナヘ塚遺跡
  2. 上カナヘ塚遺跡
  3. 西来待構穴群
  4. 伊野谷遺跡
  5. イヅレ遺跡
  6. 東風奥遺跡
  7. 屋敷余り遺跡
  8. 竹の下遺跡
  9. 中島屋敷遺跡
  10. 中島遺跡
  11. 後屋敷遺跡
  12. 西河内屋敷遺跡
  13. 伊賀見古墳群
  14. 後姫遺跡
  15. 奥遺跡
  16. 萩古墳
  17. 弦遺跡
  18. 無江遺跡
  19. 小昭姫遺跡
  20. カシャク遺跡
  21. 香の木遺跡
  22. 一里塚遺跡
  23. 深岸遺跡
  24. 小宮田遺跡
  25. 向野原遺跡
  26. 下野原遺跡
  27. 鹿登坂遺跡
  28. 平井越遺跡
  29. 上野原遺跡
  30. ハデ場遺跡
  31. 岩穴口遺跡
  32. 典十田遺跡
  33. 打越遺跡
  34. 山神谷遺跡
  35. 後谷横穴
  36. 空道跡
  37. 長櫛遺跡
  38. 犬石、猪石
  39. 白石坪の内遺跡
  40. 半道跡
  41. 下の空古墳
  42. 坪の内古墳
  43. 上西遺跡
  44. ホウジ遺跡
  45. 宮の前遺跡
  46. 的場遺跡
  47. 椎山古墳群
  48. 山道跡
  49. イエナリ遺跡
  50. カノチ遺跡
  51. 大谷遺跡
  52. 犬遺跡
  53. 北垣房遺跡
  54. 北垣遺跡
  55. 掛木遺跡
  56. 梅の木遺跡
  57. 上後ケ市遺跡
  58. 以後ケ市遺跡
  59. 寺の前遺跡
  60. 鴨田遺跡
  61. 宮原遺跡
  62. 荒田遺跡
  63. 宮の奥遺跡
  64. 柄塙遺跡
  65. 大久保遺跡
  66. 南畠遺跡
  67. 大野鉢
  68. 地前遺跡
  69. 堂床遺跡
  70. 横枕遺跡
  71. 上半田道跡
  72. 鹿塙遺跡
  73. 柏の木遺跡
  74. 女ヶ峰横穴
  75. 外垣内遺跡
  76. 原田遺跡
  77. 前ケ市遺跡
  78. 佐賀利遺跡
  79. 才占塙
  80. 向原遺跡
  81. 水溜古墳群
  82. 清水谷遺跡
  83. 矢頭遺跡
  84. 井の尻遺跡
  85. 鶯下遺跡
  86. 角田遺跡
  87. 西代横穴
  88. 橫町遺跡
  89. 橫町横穴
  90. 八斗久保遺跡
- (この遺跡分布図は昭和62年に町単事業でおこなった遺跡分布調査の成果をとり入れている。)

### III 遺 跡 の 概 要

#### 椎山古墳群

椎山古墳群は幅の広い舌状丘陵に分布する4基の古墳からなり、丘陵の中央部で、群内で最も高位に位置するのか前方後円墳の1号墳である。1号墳を基準とすると、北東方向100mに位置するのが方墳の2号墳、北に160mに位置するのが方墳の3号墳、4号墳である。2号墳と3号墳の間は105mを測る。標高をみると、1号墳の後円頂部で57.1m、2号墳の頂部で47.6m、3号墳の頂部で37.0mを測る。

椎山古墳群は宍道町内で見られる古墳群と比べると、幅広い丘陵上に造られており、それぞれが高さのある墳丘をもつ。ただ、1号墳と2号墳間の距離が100m、2号墳と3号墳間の距離が105m、1号墳と3号、4号墳間の距離が160mであるように、一つの古墳群としてのまとまりはあるのだろうが、かなり距離をもって古墳を造っている。現在のところ、4基の古墳が確認できるのみだが、墳丘を持たない土括墓等の存在は充分考えられよう。

#### 椎山1号墳

椎山1号墳は古墳群の散在する幅広い尾根の奥まった地点に位置するもので、群中ではもっとも高位にあたる。他の2号、3号、4号墳が方墳であるのに対し、1号墳のみは前方後円墳であることや、他の古墳と100m以上も離れて築造されている点は椎山1号墳の性格の一端を示している。

古墳は主軸をN-52°-Wにおき、規模は前長35m、前方部先端の幅18m、くびれ部の幅約8m、後円部の直径18mを測る。前方部の標高は55mで裾部との比高は3m、くびれ部の標高は54.25mで裾部との比高は1.25m、後円部の標高57mで裾部との比高は3.5mである。

前方部には先端部と西側の2ヶ所に盗掘跡がみられ、部分的に墳形が乱れている。先端部のものは比較的小規模なもので、幅約1.5m、長さ約5m、深さ約0.5mにおよび、細長く、先端部に向かって土を搔き出している。西側のものは幅約2mから約5m、長さ約6m、深さ約0.7mにおよび、かなり幅広く土を搔き出している。これらの盗掘による墳



図3. 椎山古墳群位置図

形の乱れはあるが、前方部はほぼ直線的に開いており、頂部には平坦部がみられる。

後円部には1ヶ所の盜掘跡がみられる。これは最も規模の大きいもので、幅約3mから約5m、長さ約6m、深さ約2mにおよぶ。場所的に、また規模的にみて主体部である横穴式石室を崩し、石材を抜き出した跡と考えられるが、地元には石材を運び出して土蔵の基礎石に用いたという伝承が残っており、事実、盜掘跡の周辺には米待石の角石切石が散乱している。後円部も盜掘による墳丘の乱れはあるものの、断面は椀を伏せたような形をしており、段築などは認められない。

古墳はゆるやかな傾斜地に立地するが、墳丘を築造する前に大がかりに削土をおこなっており、墳丘を中心幅約35m、長さ約60mにわたって長方形の平坦面が形成されている。平坦面を造成することより墓域を表わしたかったのか、墳丘築造のための技術的問題なのかはよく判らない。この平坦面を標高からみてみると南から北に向かってゆるやかに下るもので、墳丘南側の裾部で約53.5m、北側裾部で約51mの比高2.5mをはかる。このため、墳裾は後円部から前方部に向かって低くなっている。

主体部は古い段階で盜掘にあったと考えられ、副葬品等の遺物は残っていないが、墳丘上や裾部に人頭大の川原石が少なからず散在しているので、外部施設として葺石をもっていたと考えられる。また墳丘およびその周辺からは埴輪片と須恵器片が見つかっている。図4の埴輪片は前回の測量調査の際に表採されたものである。一条のタガを有する部分で透孔の一部を有することから、二段のタガを有する円筒埴輪と考えた場合、下方のタガから胴部にかけての破片であろう。タガはM字形の台形で壁厚は透孔部で1cm、タガとの接合部で1.8cmをはかる。外面調整はやや傾いたタテハケで、2次調整は認めにくい。胎土は0.1cm程度の白色砂粒、黒色砂粒、石英を少量含む。焼成は良く堅緻である。色調は外面がやや黒味がかった褐色、内面はやや明るい褐色、断面は紫灰色である。他の表採埴輪も同様の焼成である。須恵器については少片であり、一片しか見つかっていないので詳しいことは不明だが、壺か壺の破片のようである。

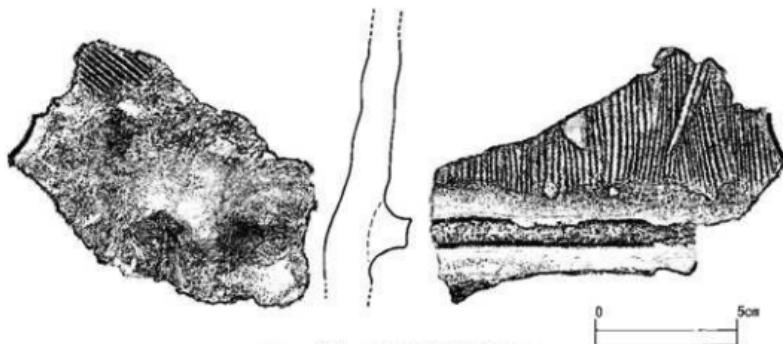


図4. 推山1号墳出土埴輪実測図

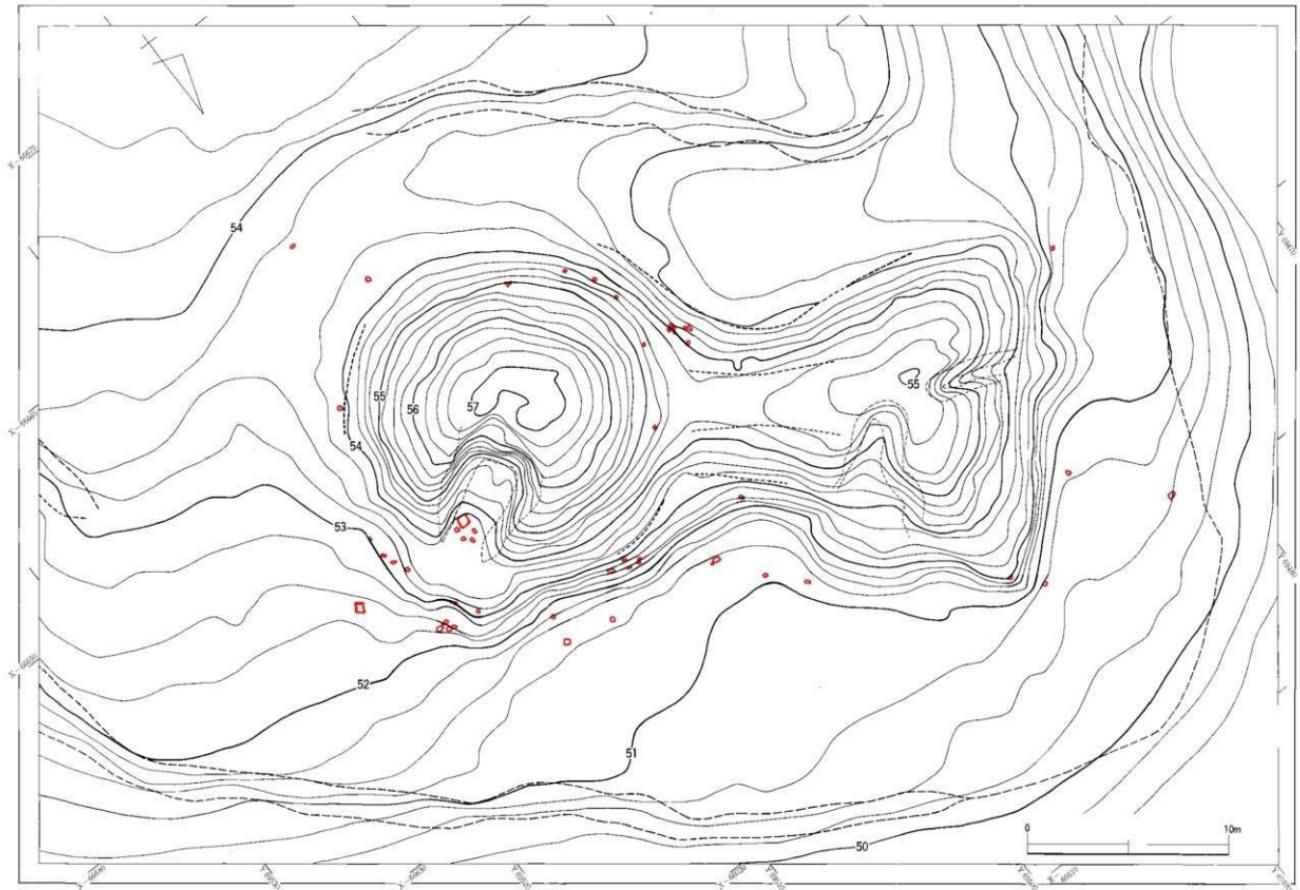


図5. 椎山1号墳々丘実測図(赤崩は散乱石)

## 椎山2号墳

2号墳は1号墳の北東方向に100m離れて立地する二段築成の方墳である。1号墳の立地する尾根はかなり広い平坦面をもち、そこより北西方向に幅広だが短い尾根が、また、北に向かって細長い尾根が派生している。2号墳は北に向かってのびる尾根のつけ根に位置している。

墳丘は尾根上の平坦面の東側に位置しているため、墳丘西側には平坦面が広がっているが、墳丘東側は墳樹より4～5m離れると急な傾斜地となっている。周囲の地形を観察すると、周辺を削平し、その上に古墳を築造したと考えられ、築造にあたっては、墳裾線が南北方向にのびていることから、土地の制約を受けたというより、方向を意識したと考えられる。

規模をみると、下段部は北側墳裾で16m、東側墳裾で17m、南側墳裾で16m、西側墳裾で16mをはかり、ほぼ正方形な墳形である。上段部の裾は北側で約11m、東側で約11m、南側で約11m、西側で約11mをはかる。頂部には4.5m四方の平坦面をつくり、最頂部は標高47.7mで、北側墳裾との比高は約2.75mである。墳頂平坦部には幅2m、長さ3.5cm、深さ約40cmの盗掘跡らしき落ち込みが認められる。

内部主体については不明だが、規模に対して墳丘高が高いことから、横穴式石室を有することが考えられる。遺物は発見されていない。

## 椎山3号墳

3号墳は2号墳の北北西方向100mに位置する。1号墳との直線距離は160mである。2号墳の立地する尾根の先端に位置しており、白石の谷を見おろすことができる。

墳丘は緩斜面に立地しており、1号墳、2号墳にみられたような古墳築造に伴う造成はあまりされていないように見受けられる。規模は1辺12mの方墳で、北に向かうコーナーは遺存状態が良く、きれいな墳裾を示している。頂部には4.5m四方の平坦面をつくり、最頂部は37.1mで、北側墳裾との比高は約1.90mをはかる。

盗掘の跡はないが、墳丘南西側斜面に人頭大の石があり、その周辺に埴輪片が散乱していた。図7-1は外縁に斜のタテハケを有する部分で胎土は白色砂粒、黒色砂粒、英石を含んでいる。図7-2はタガを有する部分だが風化が著しく、詳細はわからない。いずれの埴輪も胎土は緻密であるが、1号墳出土埴輪と比べると焼成が悪い。

内部主体は不明である。

## 椎山4号墳

3号墳と同一尾根上にあり、3号墳から東に約30mの地点にある方墳である。1号墳、2号墳、3号墳はかなり距離をへだてて立地しているが、3号墳、4号墳は近接して築造されている。



图 6. 椎山 2 号墳々丘実測図

墳丘は、その大半が削りとられ、原形を大きく損ねているため、正確な規模は明らかでないが、約10m四方の方墳であろうと考えられ、比高も他の古墳と比べると低い。出土遺物はなく、内部主体についても不明である。

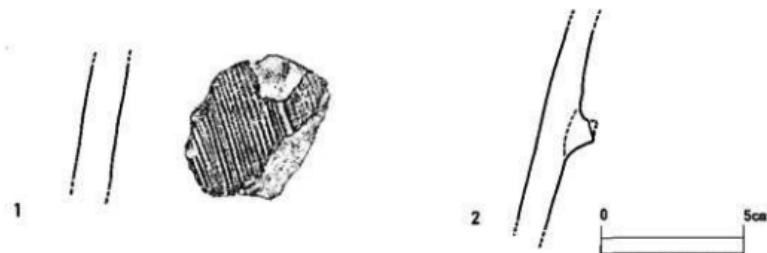


図7. 椎山3号墳出土埴輪実測図

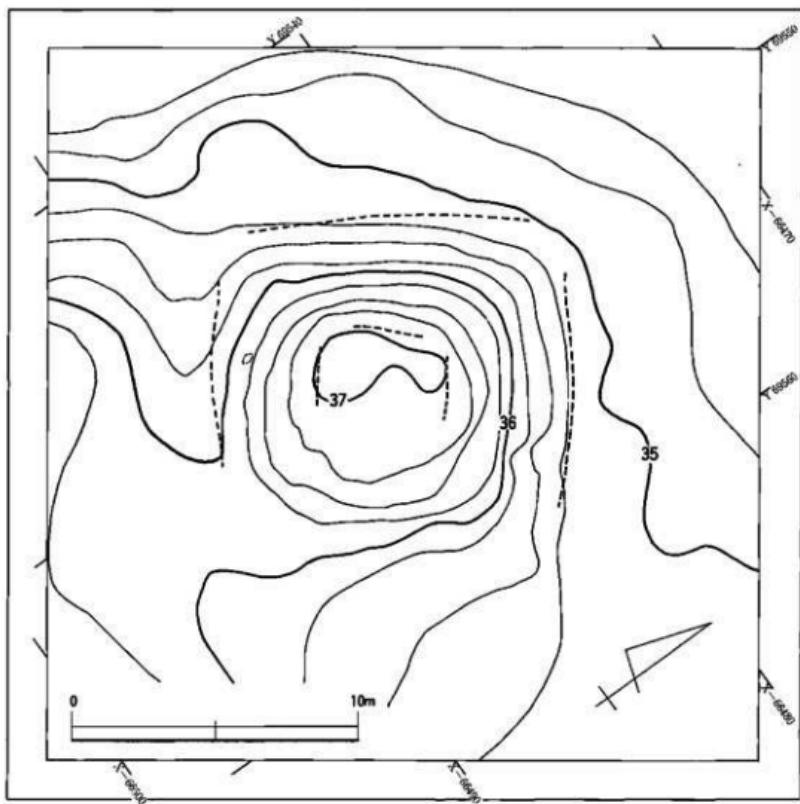


図8. 椎山3号墳々丘実測図

## まとめ

今回の椎山古墳群の調査にあたっては、当初椎山1号墳のみの大測調査に止めるつもりであったが、関係者の御協力により、2号墳、3号墳の測量と、周辺の遺跡として伊賀見1号墳の補足調査をおこなうことができた。おもむね進展の中で、昨今の行政調査が開発に伴う発掘調査に追わざるを得ない状況にありながら、ここでは、分布調査を墳丘測量という基本的作業がなし得たことに大変感謝している。発掘調査による場合と異なり、新しい発見がザクザクと出てくるというわけではないが、今回の成果を今後も利用していきたいし、また利用していただきたい。今回の調査によるものだけではないが、以下椎山古墳群の概略と、その性格について考えてみよう。

1号、2号、3号の墳丘測量には国土座標と標高を用いることができたが、これにより、古墳間の位置関係を明確にした。群は、地理的制約もあるが、数少ない古墳が距離を隔てて築造されているのが見て取れる。ただ、墳丘を持たない墳墓の存在も充分考えられ、今後の調査に期待したいし、また群中の開発には慎重な態度で臨む必要があろう。

1号墳は前長35m、前方部幅18m、くびれ部幅8m、後円部の直径18mの前方後円墳である。墳丘からは埴輪片、須恵器片と葺石が見つかっており、後円部の盗掘跡とその周囲の散乱石から主体部は横穴式石室だったといわれている。築造年代を探る手掛かりは少ないが、下に記すところにより山陰地方でも初期に導入された横穴式石室をもつ古墳の1つではないかと指定される。

2号墳は1辺約16m、上段部一辺11mの二段築成の方墳で、墳丘高は約2.75mである。遺物は一切出土していないが、墳丘高からみて、周辺に見られるような横穴式石室が納まっている可能性が強い。3号墳は一辺約12mの小方墳で、今回埴輪片が表採された。

さて、椎山古墳群の特徴は周辺に石棺式石室と呼ばれる横穴式石室が存在することである。横穴式石室がこの地に導入される際は様々な形態をもちながら、ある時期より石棺式石室をもつ方形墳が採用されていくことが指摘されており、伊賀見1号墳は定形化する以前の石棺式石室をもつ古墳<sup>注10</sup>と考えられている。そして椎山古墳群はこれら、横穴式石室が導入され、そして定形化していく過程に深く関わっていると考えられる。詳細な、具体的なことは今後の調査にまちたいところである。

注1. 野津左馬之介『鳥取県史』4 1924年

注2. 奥原福市編『八束郡誌』 1926年

注3. 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」(『山陰古墳文化の研究所収』 1971年)

注4. 『宍道町埋蔵文化財調査報告』2 宍道町教育委員会 1980年

注5. 『宍道町誌』 宍道町 1963年

注6. 『山陰本線玉造温泉 来待間線傍に伴う埋蔵文化財調査報告』 国鉄大阪工事局 1968年

注7. 『宍道町埋蔵文化財調査報告』4 1985年

注8. 注4と注5。

注9. 加藤義成『校注山雲国風土記』 1965年

注10. 『石棺式石室の研究』山陰考古学研究会 1987年

## IV 周辺の遺跡

### 1. 伊賀見1号墳

宍道湖南岸より約300m南に位置する尾根上に3基の古墳からなる伊賀見古墳群が広がるが、その最も奥まった地点に伊賀見1号墳がある。墳頂標高は25mで、周囲の水田面との比高は約20mである。

墳丘は従来12m×11mの方墳とされていたが、隣接する2号墳と呼ばれる部分を含めて前方後方墳の可能性が高いとの指摘を受けている。

石室はN-15°-Eとはば北向きに開口するもので、凝灰質砂岩（来待石）の切石を用いている。玄室は奥行1.8m、幅1.91m、高さ1.68mをはかり、奥壁は2枚の石よりなるが、他の石は一枚石である。玄室床面には床石の上、中央に、石室を縦に分するように敷かれている。

玄門は一枚石をくり抜いたもので、玄門前には「升」状の陽刻の彫られた閉塞石が遺存している。

羨道は玄室のやや西側に造られており、羨門は切石により閉塞されており、一見複室状の構造を示している。

遺物は羨道部より、須恵器の甕1、蓋壺1セット、銀環2、刀子2が、玄室部より、須恵器の提瓶1、高杯



図9. 伊賀見1号墳々丘実測図（「石棺式石室研究」に補削）

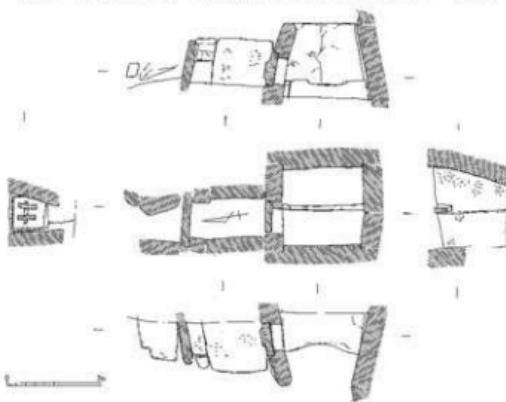


図10. 伊賀見1号墳石室実測図（「石棺式石室の研究」より）

1、匙1、掘瓶1、鉄鎌30本以上、鉄刀1が出土しており、  
須恵器は山陰須恵器編年のⅢ期に含まれるものである。

## 2. 下の空古墳

穴道湖南岸より約1.1km南に入った地にあり、伊賀見1号墳からは約900m、椎山1号墳からは約300m離れている。下の空古墳は伊賀見1号墳、椎山1号墳と異なり、平地部に面する山際に位置する。

石室はS-20°-Eに開口するが、現在は大きく崩れており、周囲に石材が散乱している。羨道、玄門についてはよく判らないが、玄室を復元すると奥行1.7m、幅1.0mである。天井石の外側は家形に加工され、頂部には幅15cmの平坦面をもつが、内面はカマボコ形に切り込まれている。

玄門は散乱する石材から推定すると、2枚の閉塞用切り込みをもつ板石立て、その上に擗石を重いたものと考えられる。閉塞石は高さ1m、幅0.8mで、表面には伊賀見1号墳、鏡北廻古墳と同様に「++」状の陽刻が彫られている。

## 3. 犬石、猪石

「出雲國風土記」の意宇郡穴道郷の条に「穴道郷 郡家ノ正西三十七里、所造天子大神命之追給猪像、南山ニ有二。(一ハ長サ二丈七尺、高サ一丈、周囲五丈七尺。一ハ長サ二丈五尺、高サ八尺、周囲四丈一尺。) 神代追猪犬像長サ一丈、高サ四尺、周囲一丈九尺。其形為石、無異猪犬、至今猶在。故云穴道。」との記述がみられる。これは穴道の地名伝承として知られる箇所であるが、この中に出てくる猪と犬の石像は、石宮神社の周辺にある巨石であると推定されている。現在、石宮神社は穴道湖南岸より同道川を上ること約800mの地点に位置しているが、風土記に言う犬の像は御神体として「犬石」と呼ばれるものであり、猪の像は鳥居の両側にあって「猪石」と呼ばれるものであろう。

石は一部が土中に埋まっており、高さなどについては不明だが、長さや、周囲の長さは風土記記載の寸法と一致する。石材は凝灰質砂岩(米待石)の自然石だと考えられるが、極めて良質であったため、千年を越える風雨にも耐え得たのだろう。風土記の時代に生きた人々の精神文化を今に伝える遺跡である。

注1. 『右棺式石室の研究』出雲考古学研究会 1987年

注2. 山本 清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)

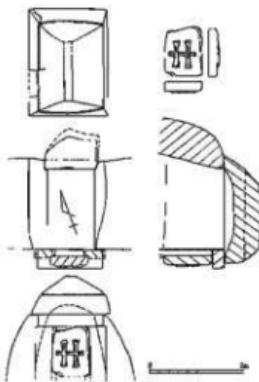
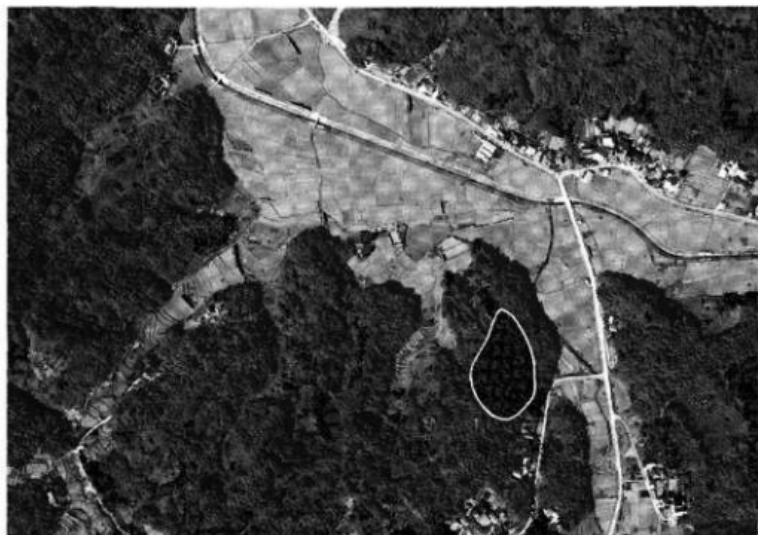


図11. 下の空古墳石室実測図

図版 1



椎山古墳群空撮（1. 椎山古墳群 2. 下の空古墳 3. 犬石、猪石）

図版 2



椎山1号墳後円部（前方部より）



図版 3



椎山1号墳前方部（後円部より）

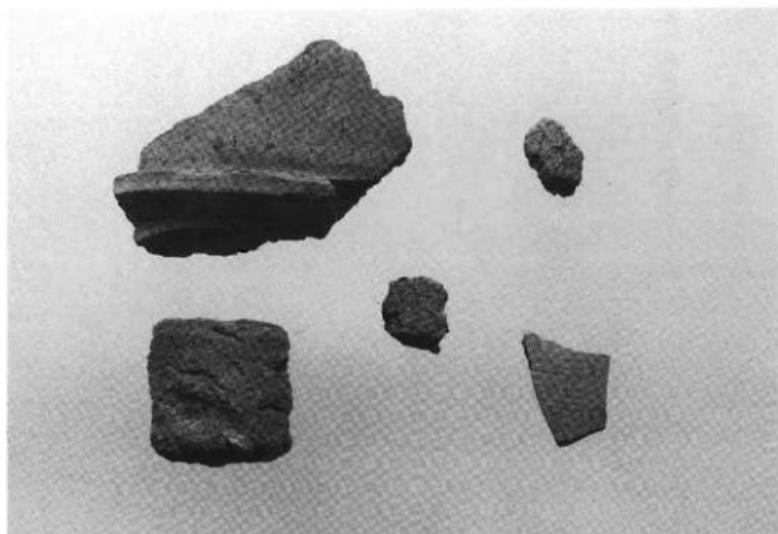
図版 4



椎山1号墳周辺の散乱石（後円部の盗掘跡内）



図版 5



椎山 1 号墳出土遺物

図版 6



椎山 2 号墳近傍（北側から）

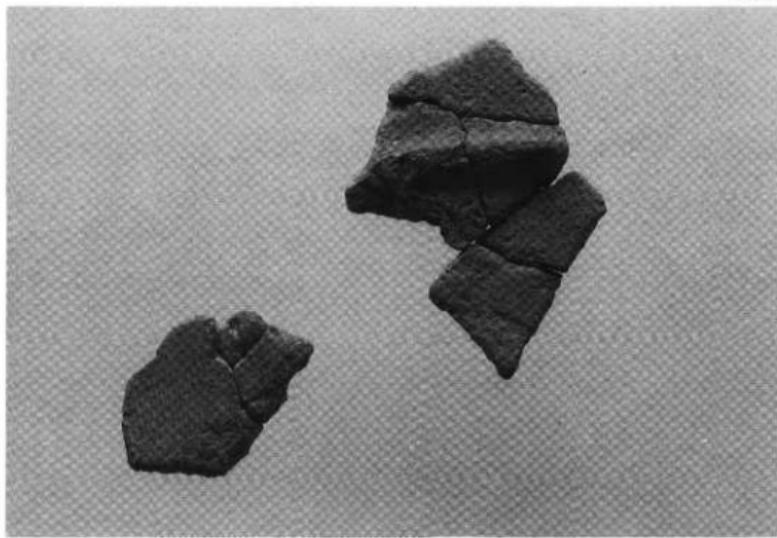


図版 7



椎山 3 号墳近景（南西側から）

図版 8



椎山 3 号墳出土埴輪



図版9



伊賀見1号墳近摺（前方部側から）

図版10



伊賀見1号墳石室



図版11



下の空古墳石室

図版12



猪石近撮（鳥居の両側にある巨石）



穴道町埋蔵文化財調査報告 7

平成元年 3月25日印刷

平成元年 3月25日発行

発 行 穴道町教育委員会  
八東郡穴道町大字昭和1番地

印 刷 柏木印刷有限会社  
松江市国屋町452-2